

ヒューマンライブラリーにおける対話と自己理解
—語り手となる「本」の語りから—
Dialogue and self-understanding in Human Libraries
- From the stories of "book" as narrators -

学籍番号：201621618

氏名：菅原 早紀

Saki SUGAHARA

ヒューマンライブラリーとは、「人を本に見立てて人に貸し出す図書館」を意味する。これは2000年にデンマークにおいて始められたものであり、社会的マイノリティであると思われる人を「本」に見立て、彼らと対話をすることによって社会における差別や偏見を低減し、人々の多様性への寛容な心を育むことを目的として行われている取り組みである。本研究では、これまであまり研究対象にされてこなかった、対話の中で主に語り手となる「本」に焦点を当て、ヒューマンライブラリーにおいて語ることが「本」にとってどのような効果があるのかについて、「本」の語りから明らかにすることを目的とする。調査方法としては、国内で行われているヒューマンライブラリーに複数回参加して参与観察を行ったほか、23名の「本」に対して半構造化インタビューを行った。その結果について考察をするにあたっては、筆者自身の経験に即したエスノグラフィー要素を含むように記述した。

まずは、抜粋した4名の「本」のライフストーリーについて記述し、「本」の背景や人物像について明らかにした。続いて、23名へのインタビューから明らかになったこととして、(1)ヒューマンライブラリーに参加するにあたり、「本」は4つの段階で自己の内省を行っており、その内省は自分自身の物語を構築していく上で重要な役割を果たすこと、(2)ヒューマンライブラリーに参加する「本」は繰り返し参加する傾向が強く、その理由としては自分自身の成長がみられること等が挙げられたが、その一方で参加することに対する葛藤を感じながら、それを乗り越えて変化していこうとしていることが分かった。また、ハーバーマスの対話理論を用いて考察することで、彼の理論の範疇では収まりきらないヒューマンライブラリーにおけるコミュニケーションのあり方が認められた。最後に、筆者自身が「本」になった経験をオートエスノグラフィーという手法を用いて赤裸々に記述し、「本」という立場に立ったからこそ見えた視点を明らかにした。

以上から、ヒューマンライブラリーにおける対話や、そこで「本」が語ることの意義は、自身のマイノリティ性や属性に対して悩みを抱える「本」にとって新たな気づきや自己理解を促すきっかけになるということであると主張でき、またヒューマンライブラリーの新たな側面として「本」自身がより生きやすくなることを目指していることが示唆された。

研究指導教員：後藤 嘉宏
副研究指導教員：照山 絢子